

## ソメイヨシノ時計店の時間外案内図

望月苑巳

雪のように降ってくる

ソメイヨシノに箸をつけると、儂くなった父を思い出すのです。

時計店の店先は父と母

それにぼくの弟と妹の鼓動で震えていました。

「笑い屑」

あの日見放したひとときわ濃い闇に抱かれて、

それは井戸の底に降り積もっていました。

重力があるから魚は空を飛べないし

人は空の穴へは落ちていかない

逆に心の陥穽から這い上がってくる人だっているのです。

あなたもその一人でしたね、オトウサン。

子供を食べるように時計のレシピを食べて

鬼のような顔つきでゼンマイを巻いていましたね。

あざけ笑いながら時を刻むことが

ソメイヨシノを一枚ずつ剥がしてゆくのと同じだと

言い張りましたね。

あの時から時計店の食卓では

一般相対性理論の味噌汁を

啜るようになったのですね。

そうでなければ

地平線の特異点は

長針にからまったまま止まってしまったことでしょう。

人の笑いがころげ終わるころ

ポロリと剥がれ落ちる、見えない「笑い屑」

儂くなる前の父は

いつも井戸の底で雨のように泣いていました。

夕陽のような母や弟や妹の血の色で

ソメイヨシノは染め上がるから

ぼくは塩漬けにして食べる義務を負うのです。

時計店は今日も

賑やかな時間に抱かれて閉店するのですね

オトウサン。